

約の條件習慣などを知らむには一篇でも史料の多い方が妥當なる結論を得易い譯であるが龍德肆年のものは典型的のものであるから、他の七篇を之に加へても別に結論に相違を出せぬ故之にて宜しいが、僅少なる史料より妥當適正なる結論を下さむには、之に利用する文書が典型的完備のものたることを要する。若し典型的完備のものが二三篇あらば多數の同類同種文書の羅列は必ずしも必須事には非ず、幸にも本書各部に引用利用せらるゝ熾燿其の他の地よりする發見根本史料は概ね典型的に近い文書である様である上に、豊富なる書籍上よりする該博なる著者の法律的智識を以て之を咀嚼解釋せられてあるから、全體を通じて唐宋時代の法律の實際運用上の實情を察知することが出来るのみならず、施いては我が平安朝時代のそれを研究する上に於ても缺くべからざる研究である。過日我が文學部國史研究室主催にて展覧せられたる第二回神道史資料展覧に東唯一氏所藏として出陳せられたる寛平八年、天曆十年、貞元三年、寛弘三年の年紀ある山田郷長籍や長和二年の年紀ある所領地林相替狀、寛仁三年の年紀ある所領畠地賣券などの文書形式が唐宋時代の同種文書と殆んど形式を一にせるなどは興味深く、國史家も亦一應を讀まれて各種文書と比較せらるゝ必要があらう。蓋し本書は此等支那西陲發見の根本史料を利用活用したる法律學者の支那法律の研究の未曾有の編著にして永久に和漢法律史學界に貢獻する功績は不滅と申しても過言でないからう。同君の學的努力と學的貢獻とに對して滿腔の敬意を表したい。附録の圖版は熾燿・吐魯番・和闐其の他にて發見された根

本史料の寫眞二十五種にして何れも天下の孤本と謂ふべく、索引も事項索引の上に本書に相應はしい法律文書索引が立てられ、用意の周到・讀者學者に對する學的親切の情が顯れて居る。私は敢て東洋史學支那史學專攻の研究者のみならず、國史專攻の學者にも一本を座右に備ふるの必要あるを信する者である。妄言多罪、東方文化學院東京研究所發行、定價九。〇〇圓(那波利貞)

○滿和辭典

文學博士 羽田 亨編

我東洋史學界特に滿洲史學界は昨年末に於て一大福音に接した事を同人と共に慶賀せねばならない。それは外でもない京大滿蒙調査會の事業の一として羽田博士監修の下に京大文學部東洋史教室の青年學徒の手によりて編纂された滿和辭典の完成出版である。先に滿洲國成立して既に數年隆々たる國勢の伸展は世界驚異の一であり、又今や支那赤化防止、東洋平和實現の大理想大使命の下に着々戰果を收めつゝある皇軍聖戰に伴つて内蒙古人は蒙古聯盟自治政府を樹立して新しき國家活動に踏み出し、北支には既に中華民國臨時政府が成立し活動を開始した。東亞の一角は正に新しき平和境實現の黎明が訪れて來た。是に至つて吾人の滿蒙支に對する認識は新にさるべく再認識再檢討が要求されるのである。我が國民として殊に東洋平和世界平和の具現者として、又一而東洋文化各般の保護者指導者として尊き使命を帯るものとし

て、滿蒙支に對する認識檢討は更に是非とも新しくされねばならない。それには先づ滿蒙支の過去の歴史を知り民族を識り風土習慣を知り、更に是を見直さねばならないのである。その役を買つて出るべきは我々其の方面の研究に従事するものを措いて他になく、我々學究の使命はかくする事によつて、國家の福利を増進し國家の發展に資して以て一段の光輝を發し得ると思ふのである。従つてこの際その方面の研究に従ふ學徒として一層研究の責任と義務とを負ふべきは言ふ迄もない。かゝる時此に再認識再檢討の具の一として滿和辭典が上梓發行された事を心から喜ぶのである。

さて顧みるに我國に於る滿洲研究は徳川末期に始つたが、それは極めて一部の人の業に止り廣く一般になされたものではなかつた。就中滿洲研究の入門、第一階梯ともいふべき滿洲語の研究は漸く文化元年ロシアの使節が他の國書と共に滿洲文で書いた國信を齎らして開國を求めたのを契機として、同五年その翻譯を命ぜられた高橋景保に始つたにすぎない。彼は之を成したる後、滿文集韻、増訂滿文輯韻、清文鑑名物語抄等を著はして多大の功績を留めたが、之と共に長崎の譯官等も命をうけて滿洲語の研究をなし、辭書の編纂に従事したが、容易に進捗せず、約五十年後の嘉永四年より安政二年にかけて纔かに清文鑑和解と翻譯滿語編纂と計五十五冊が出来たのみで、計畫された辭書の完成は遂に見るに至らなかつた。かくの如くロシアとの政治的交渉によつて播かれた滿洲語研究はその後國交上無用なる事認められるや捨てられて世

人から忘れられてしまつた。然るに明治末期以來東洋學の進展と共に滿洲語の研究も再び始められたが、その進歩は甚だ遅々たるもので、歐洲に於る斯學の發達に及ぶべくもなく、唯その成績に依據して研究をなすにすぎなかつた。従つて我國で初めてその研究に入らんとするはなか／＼困難で、辭書や學習書はあつても殆んど手に入らぬ歐人の書や難解の支那の書で日本語で書かれたものなく、容易な事ではなかつた。大阪外語講師として十餘年間滿洲語を教授された故渡部憲太郎先生が生前よくこの事を話された事を想ひ、又滿洲文典を著はされた時にこの事を述べられた事をおへりみる時その偽でない事を知るのである。而して故先生はその不便を痛感して自ら文典を作り、又清文彙書によつて滿和辭書を著作され稿は夙に成つたが付印成るに及ばずして他界されたのであつた。然し大正を経て昭和に入るやこの方面の研究は漸くさかんになり、殊に昭和六七年頃より東亞の政情が一大變轉を來すと共に滿洲史滿洲文獻の研究と共に滿洲語の研究が俄然さかんになつて來た。京大の青年學徒に特にこの方面の研究熱が起きたのも實にこの頃であつた。爾來京大に於ける滿蒙史の研究、滿蒙語の研究は他の大學の追隨を許さぬ所となつたのであるが、その滿洲語の研究を始めてから僅かに數年ならざる京大學生により今回此に滿和辭典が著はされた事は實にその熱烈なる研究心の賜であり非常なる苦心精勵の結晶に外ならない。而して今回の辭典の編纂は監督指導者たる羽田博士とその助編者たる山本、藤枝、今西、三田村四學士との渾和的努力によりなされた事を忘れてはならぬ

い。羽田博士の東洋史學者としての名聲は今更贅言を用ひずして明らかであるが、今次の辭典の編纂を始めらるゝや終始懇切熱心に指導勸勵され、その初めカードに語彙を收録する時より一々に付けて審問論議を重ねて譯語の正確を期せられたのみならず、いよく付印に際しては多忙の餘暇を割いて補正より校正迄も必ず目を通され、殊に官命を以て臺灣その他に出張旅行された時は船中宿舎に於ても校閲校正して送附されたと聞いては實に一字一句をも苟もされず、嚴正精確を期せられる學者的良心の如何を如實に示されたものとして後學一同の眞にその崇高なる態度に頭を垂れざるを得ない次第である。故にこの書成るは、實に坊間往々にしてみる所の單なる名義のみの校閲監修と異り、眞に心血を注がれた結果であり、その成果に於て他の追隨模倣を許さぬものである事は今更申すに及ばないのである。既に監修者たる羽田博士がかゝる眞摯なる態度を以て臨まれた時、その助編者として直接その事に當つた所の山本、藤枝、今西、三田村四君の努力が亦獻身的であつた事は言ふ迄もなからう。初め山本君がその事に當られたが、間もなく命を以て滿洲に去つた後、三君が先生に負けじと殆んど晝夜兼行にて他事をかへりみず只管その任を遂行した努力は非常なものであつた。本来辭典の編纂の如き仕事は或點からして所謂面白いものであるかも知れぬが、筆者の淺い経験からしては決して面白いものと言へず、寧ろ無味乾燥なものであり縁の下力持である。自分がこんなにも苦勞して居るのに世間のものは何とも思つてくれぬだらう、この苦勞を諒解してくれぬだらうと

考へるとやる氣も失せるのであつた。然しそれが今回の如き特殊語であり殊に今日の東亞の現狀に即したものである事を考へる時、諸氏の血はたぎりひた向きに忠實なる譯語解明に力を致し以て之が完成に進まれた事と信じて疑はない。而して一度この書が出てよりどれだけ世人が利便をうけるかを考へ、更にこれにより今後如何に滿洲の研究が進むかと思ふ時、筆者はその完成出版を羽田博士並に助編諸氏の爲、又國家學界の爲心から感謝と敬意を表するに吝さかでない次第である。

さて今回の辭典は羽田博士の序文にも見える如く、「初めは廣く資料を集めて編纂せんとしたが中途方針を變じて増訂清文鑑に基き四體・五體の清文鑑及び清文彙書の語彙を收める事に止めた」といふ事である。之は一面滿洲語辭書として物足らぬ感がするが、一面滿蒙調査會の事業として完成を急ぐ事情があつたといふ事である以上、又無理からぬ事と思ふ。従つて右様の次第であるから、(1)語彙蒐録の範圍が限られたといふ事は已むを得ぬ事であり、(2)編纂者が他の資料により收得した語彙も譯語も省略せざるを得なかつた事も可成り有つた事と思ふが、これは他日の増補に俟つ事としたい。(3)又欲をいへば品詞の別を記して欲しかつたし、動詞の形をも整理して欲しい所も可成りある。今日不規則動詞として過去形のみ用ひられるものにもその現在不定形、語根の還元し得るものあり、これを何等かの方法で示す事は必要かとも思ふ。然しこれも是非せねばならぬ事でもなからうし、又この辭書を用ふる程の人ならば、その點一應心得ある人ともいへるから、それ

に及ばぬとも言ひ得るであらう。(4)又簡単な文法を巻末附録として載せられたら一層便利であつたと思ふのは、筆者のみの欲望でもないと思ふが、今日メルレンドルフ文典の覆印本を安易に入手し得る時、それに及ばなかつた事かと察せられる。(5)凡て譯字符號はメルレンドルフ文典によつたとは助編者の一人の話であるが、それがよいか悪いかは種々問題となる所あり、殊にその特殊子音の寫し方に筆者も一考を要すると思ふものがあるので、今回の業に之を論じて是正さるべき餘地あつたのではないかと考へる。然しメルレンドルフ文典は一般的に分り易く、暫くはそのまゝにされても別段咎むべき事でないとも云へよう。以上の如き諸點は本辭書を披閱する時何人も直に氣付く事であらうし、編者も十分承知の事と思ふが、編纂方針が既述の通りであつた以上格別論議するに及ばぬと思ふ。滿洲字を入れぬ爲に巻頭に別に文字表を附せられある事、語彙の配列がローマ字順によつた事、譯語の精確な事、同類熟語を一個所に集められたる事等は使用者に多大の利便を與へる事であつて、此にも編纂者の隠れた苦勞努力の存する事を推賞したいのである。願くは今後これを土臺として更に廣く多方面に互つて語彙を蒐集しより完全な大辭典の完成出現されん事を期待して已まない。以上燕辭を連ねて紹介の辭とし、併せて羽田博士初め編纂者諸氏の勞苦を重ねて謝すると共に學界のこの書を獲たるを衷心祝福する。切に斯界好學の士の一本を備へられん事を祈つて筆を擱く次第である。

(菊判本文四百八十頁。定價五圓。京大滿蒙調査會刊並に發賣。

紹介

京都彙文堂、東京丸善書店取次販賣(爲淵)

### ○北米合衆國新地誌

楠田 鎮 雄 著

地理書の出版が未だ教科書・概論の類に止つてゐて、各國地誌が大いに要求される今日、老練の著者が合衆國の地誌を世に投せられたのは何を措いても喜ぶべきことであらう。

本書は『今一度エマーソンの言も、ロングフェローの詩も、はてはヘルコロロンビヤの曲でさへ口誦んでみたい』といふ著者が一氣に筆を取つて極めて自由の立場で書いたといはれてゐるのであるから、この書を読む人は先づこの事を頭に入れておけば失望することはあるまい。多小通觀上の不便や地理學的分析があまり顧慮されてゐないとかいふ點は他の書について求められたらよい。

地體構造や地形について充分スペースが與へられてゐるのは、開拓の歴史、地名の解説と共に最も著しい特色をなしてゐる。土語に由來するものを始めオランダ・スペイン・イギリス以下諸國語より、又既存の地名・人名等より命名されたものが多く存して極めて錯雜してゐる合衆國では地名の由來意義を解説してゐるのは極めて適當であらう。各地出身の學者詩人政治家實業家等も必要に應じて潤に富んだ説述をしてゐる。

形式の整つてゐる代りに生硬で皮相的なものゝ多い中で、この地誌は著者の蘊蓄と流暢な文によつて讀者の手をとつて案内して